

染 矢 源 治 教 授 退 職 に よ せ て



痛くなく安全で、快適な 歯科医療を求めて

歯科侵襲管理学分野 染 矢 源 治
(歯科麻酔科)

昭和51年4月に新潟大学歯学部附属病院に赴任して以来34年間の長きにわたって、「短気で、我が儘」を自他共に認める小生は、多くの人々に支えられながら、歯学の領域では特異で、甚だ小さな一家である歯科麻酔科の親父として、楽しく、極めて充実した時を刻むことができました。この機会をお借りして、これまで歯学部の皆様から歯科麻酔科共々に賜りましたご支援、ご協力に心より感謝し、益々のご発展をお祈り申し上げます。

誠にありがとうございました。

〈同窓の大先輩との一夏の出会いから〉

今から40年前、福岡県立九州歯科大学の6年生だった昭和44年8月、臨床実習が夏休みになる1ヶ月間を利用して、四国の足摺岬に近い愛媛県の辺境にある小さな漁業の町で開業していた空手部の大先輩に、大学の許可もなく無理矢理頼み込み、親友と二人で自主的に臨床研修をさせて頂いた。すでに大学附属病院で患者さんの治療を多少経験していたので、先輩の家に居候しながらノンビリ釣りでもして、学生時代最後の夏休みを目一杯楽しみつっほんの少しだけ臨床の勉強をするのが目的で、臨床研修と書けば響きはよいが、ポン友と仕組んだ全くよこしまな発想だった。

しかし、夜の明けやらぬ早朝から診療所の玄関前に置かれた予約の整理番号札を取った後一旦帰宅し、改めて8時30分からの治療を受ける患者さんは、夏休みのため子供も多く、日々80人を超えていた。子供達の喧噪の中、浸潤麻酔や伝達麻酔を駆使して多数齲歯の片顎一括治療や抜歯、嚢胞摘出などを的確かつ効率よく進め、子供達や高齢

の患者さんともコミュニケーションをとり絶大な信頼を得ている先輩の姿に驚愕した。ある日の診療の最後に、先輩の指導を受けながら下顎の埋伏智歯の抜歯をした。時折水銀血圧計で血圧を測りながら、浸潤麻酔に加え、痛みのため伝達麻酔を途中で追加し、3時間余掛かったのに何一つ不満を言わずに耐えてくれた81歳のお婆さん、「痛くて、辛い思いをさせて済みません」と謝ると、逆に「頑張ってくれたね、ありがとう」、ガーゼを噛んだままモグモグと言って帰った姿が走馬燈を見ているように未だ鮮明に脳裏に浮かぶ。

3日間のお盆休みに、金が無いためテントを担ぎ、ローカルバスで県境の峠を越え、高知県の足摺岬でキャンプした以外は遊ぶ暇もなく、また学生にもかかわらず快く治療をさせてくれた大らかな大勢の患者さん達のお陰で悪巧みの思惑は見事に外れたが、僅か1ヶ月の間に大学の臨床実習とは異なる極めて多くのことを学ぶことができ、患者さんにも、同窓の先輩にも感謝の気持ちで一杯になった。いまと違って患者さんを含めた社会全体が極めて鷹揚で、医療紛争など考えも及ばない、真に古き良き時代であった。

大学5年生の頃から補綴が好きで、同級生数人とポーセレンワークのスタディグループを作り、大学の先生と時々日曜日の1日を利用して1年以上にわたり勉強をしていたので卒業後は補綴科にしばらくは残るものと漫然と自分では思っていた。しかし、この一夏の体験で、痛くなく安全で、さらに快適な歯科医療の必要性を痛感し、歯科麻酔の勉強不足がつくづく身に染み、これを契機に

卒業後の進路を急遽変更することにした。

この同窓の大先輩との一夏の出会いが生涯の仕事となった斯学の道へ進むきっかけであった。大学時代の先輩や後輩、同僚や同級生との出会いはその後の人の生き様を左右するほど大切なことであり、同窓の好しみのありがたさを痛切に感じた。学部は、先輩、後輩、同級生らが同じ学び舎で勉強し、遊び、同じ郷で暮らして同じ釜の飯を食い、共に青春時代を過ごした個人の心の拠り所として、また様々な形で個々人の間に強い心の繋がりがあってこそ成り立ち、人が人を思いやる心豊かな人間形成のための意義ある集合体と成り得る。この本質が希薄になれば人の集団としての学部や大学存在の意味は薄く、短に烏（優秀な鷹であるにも拘わらず）合の衆でしかない。このことは、学部を形成する医局など、小集団の場合も同じであろう。

ことさら敷衍するまでもないが、新潟は今も昔も変わらず四季の移ろいが鮮やかで、冬場の雪を代表に、山、川、海を抱く豊かな自然、豊かな食べ物、様々な文化があり、人々は大らかで、最も素晴らしい郷であろう。生きることに厳しい時代だからこそ、最も感性の豊かな青春時代の6年間、研修医、大学院を含めると10年間以上をこの素晴らしい郷で学ぶ学生達は、建物がプレハブから立派な高層建築に変わろうとも、共に優れた歯科医になろうとしてみなしてがむしゃらに学び、遊び、ひたすら生きた歯学部創立期、揺籃期の学生気質といつまでも同じであって欲しいと、同じ時代を生きた者として願う。

〈それからの40年〉

大学卒業後、母校に歯科麻酔科がなかったこともあり、また多少の縁あって、歯学部で最初に設置された東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座の大学院生として、生涯の恩師となった久保田康耶教授の下で歯科麻酔学を学び始めた。歯科麻酔学講座は医学部よりも設置が1年早く、入局当時の医局は雨宮義弘助教授（後に鶴見大学歯学部歯科麻酔科教授）、平井栄一講師（石岡市開業）を中心に臨床経験の豊富な人材を多く抱えた臨床教室だったが、大学院生は僅かに1年先輩（初めての大学院生）が一人居るだけであった。前年まで続

いた大学紛争の痕跡は殆どなく、勉強は落ち着いてできる雰囲気だったが、研究器材は買ったばかりの動物実験用の人工呼吸器と8CHのポリグラフのみで、しかも大学院入学後間もなく久保田教授は1年間の予定で海外出張のため不在となった。この五里霧中の状態で見つけた一筋の光は呼吸と循環の生理学、循環の薬理学や心電図診断学の面白さであった。これらを中心に成書や文献を無我夢中で読み、おこがましいが、自分なりに良く勉強したと思う。これは後の臨床で大いに役に立ち、大きな自信ともなった。

大学院修了後、東京都立清瀬小児病院で10ヶ月間小児麻酔を研修した後、第2の恩師となった大橋靖教授が主宰する口腔外科学第2講座の数少ない助手の席を麻酔医に割いて頂き在籍していた海野雅浩講師（後に東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座教授）の後任として新潟に赴任した。歯科麻酔専門医は口腔外科学第1講座に在籍していた谷田部雄二先生（新潟市開業）と僅か2名で、他大学の歯科麻酔班に比べて極端に少なかった。単心室や極型のファロー四徴症など様々な先天性心臓奇形を合併する唇顎口蓋裂の乳児ら、ペースメーカー植え込み患者、重症の糖尿病患者、透析患者等々、それまで歯科麻酔領域では症例報告の全くなかった幾多の困難な症例の麻酔管理を次々と無事に成し得ることができた。今日に比べると、人もいなく、知識は乏しく、器材も稚拙で、優れた薬剤も無く、極めて劣悪な状況下ではあったが、当時成しえる最善を尽くして麻酔管理を行った。しかし、日本歯科麻酔学会でこれらの症例を発表する度に、こんな危険な患者にどうして麻酔をしたのかと他大学の偉い教授連中にいつも質問され、叱責されはしたが、その後に他大学からも同じような症例が次々と報告されたのを見ると斯学の発展に大いに役に立ったと思う。中には辛い思いの残った症例も幾つかあるが、これらは全て思い出深い、そして後の自検例にとっても参考になり、貴重な経験となった。

臨床症例の一例、一例を大事にして、その中の問題点を捉え、あるいは困難な問題に対して暗中模索の中、悩み、解決に向かって自ら調べて懸命に学び、解決策を見いだすことのみが臨床家が育

つ術であることを久保田教授、大橋教授、両恩師から教わった。ライオンは子供を崖から落とし、自ら這いずり上がった子だけを育てるといふ。温室で蝶よ、花よと手取足取り指導して大切に育てることも方法の一つかもしれないが、最高学府で学ぶ者、最高学府を卒業した者に対し、鬼の心を持って放置することも少しは必要であると思う。いずれは独り立ちし、また、歯学教育のカリキュラムによる必然的な知識の不足部分は自ら学ぶしか解決できず、成長はありえないからである。

〈患者さんから学んだこと〉

40年間の歯科麻酔の仕事の中で、最後の拠り所として歯科麻酔科に紹介されて来る非定型顔面痛や神経因性疼痛などの慢性疼痛、癌性疼痛、末期癌の終末医療、等々の疾患は確実な治療法がないことが多く、歯科麻酔医としては極めて辛い思いをした。激しい痛みや直面する死への不安や絶望、悲しみのために打ち拉がれて涙を流す患者さんを前にして、どうすることもできず、ひたすら訴えを聞くことしかできなかった。これらの患者さん達のそれぞれに最も合う治療法 (narrative therapy) を模索しながら、神経ブロック、モルヒネ鎮痛療法、あるいは鍼灸、理学療法などの補完医療 (alternative therapy) や緩和医療 (palliative therapy) を行う傍ら、診察時の心と心の交流を通して人として信頼し合い、病悩を真に共感すれば患者さんは次第に心穏やかに、そして笑顔を取り戻してくれることを学んだ。治療により、辛い病で苦しんでいた患者さんに笑顔が戻ることで得られる幸せは、いうまでもなくささやかではあるが、いつの時代でも変わらない医療の真髄であろう。歯科治療の内容だけにこだわり、ともすれば患者の心に無関心になりがちな一般歯科治療ではなかなか得られない医療人としてのしみじみとした幸福感、喜びを患者さんからこれまで幸いにも沢山頂くことができたことを心から感謝し、歯科麻酔は素晴らしい仕事であり、また歯科麻酔医であることを誇りに思っている。歯科麻酔医として、日々の診療では口腔外科医や医師と同じように患者さんの死と常に直接対峙して

きた。手術や全身麻酔に伴う不安や病死への恐怖や不安をどうしたら和らげられるのか常に苦慮し、人の命の尊厳や心の琴線と常に向き合いながら、これまで患者さんやその家族に接してきた。言い換えれば、患者さんと共に歩み、患者さんに教えられつつ歩んだ40年といっても過言ではない。

最近、歯科医は「人にとって食べることは命に拘わること、口腔疾患と全身は拘わっている、だから命を扱う職業だ」と声高らかに話す。そうであるなら、全ての歯科医は一度でいいから自ら受け持つ患者さんの死に直接立ち会い、これによってのみ知ることができる医療人としての辛さ、人の命の尊厳を知るべきであろう。念を押すようだが、いま歯科医は、ことさら人の命を取り扱っているという真摯な感性が求められている (医歯一元論の一要素)。それでこそ、食べることの大切さを人に説得できるものと考え。EBM だけや口先だけでは病悩の全ての人を心底納得させられる筈がないと思うからである。

〈プロローグ〉

赴任時のプレハブ研究室からスタートして34年の歳月を経た現在、麻酔の知識と医療技術は目を見張るほどに格段の進歩を遂げた。そして、これらは、少人数ではあったが、自ら学び、成長した精鋭の後輩に着実に受け渡すことができたと思う。固より浅学非才のため、忸怩たる思いはあるが、見事に大きく育った医局員や (建) 物を眺めると心から嬉しさが込み上げてくる。

繰り返しになるが、これまで歩んで来られたのは同窓の大先輩との学生時代の一夏の出会いから始まり、そして、人の命に拘わる医療に伴う艱難辛苦を共に味わい、治療の成否と共に一喜一憂しながら、物心両面で支えていただいた恩師や先輩は勿論、同僚、後輩を含めた尊敬できる多くの素晴らしい人々との邂逅があったからこそであり、いま、ひたすら感謝の気持ちで一杯である。

退職後もこれらのことを最も大切にしつつ、僅かになった人生の新たな旅に出たい。

染矢源治教授のご定年退職によせて

歯学部長 前田健康

新潟大学大学院医歯学総合研究科歯科侵襲管理学分野教授染矢源治先生、無事つつがなく、ご定年退職の日をお迎えになり、誠におめでとうございます。染矢源治先生が平成22年3月31日をもってご定年退職されるにあたり、新潟大学歯学部、大学院医歯学総合研究科および医歯学総合病院に対する長年にわたる教育、研究、臨床におけるご貢献に敬意を表するとともに深く感謝の念をささげます。

染矢先生は、1970年、九州歯科大学をご卒業後、東京医科歯科大学大学院歯学研究科（臨床学系歯科麻酔学専攻）に進まれ、1976年、同大学院修了し、歯学博士の学位を修得されております。1976年、新潟大学歯学部第二口腔外科学講座（主任：現大橋靖名誉教授）助手に採用され、歯学部附属病院講師（1977年）、歯学部助教授（1981）年を経て、1990年に新設された新潟大学歯学部附属病院歯科麻酔科の初代教授にご就任されました。2001年の大学院医歯学総合研究科の新設に伴い、歯科麻酔科は顎顔面再建学講座 歯科侵襲管理学分野となり、染矢先生は大学院博士講座担当教授として、教育、研究、臨床に情熱を注がれて参りました。また、この間、2000年からは歯学部附属病院副病院長にご就任され、同病院の管理運営にご尽力されました。

歯科麻酔学は一般歯科診療、特に口腔外科手術等、精緻な全身管理、疼痛管理を行う歯科医学・医療の重要な学問分野の一つであることは衆目の一致するところですが、大学院部局化前の歯学部では、種々の状況から病院診療科である歯科麻酔科を講座化することが困難でありました。また、教員定員削減問題から、診療科定員を増やすことができず、膨大な仕事量に対する人員の慢性的な不足が続いておりました。このような中、染矢源治先生は朝早くから手術場に来られ、ご定年の日まで、自ら率先して、全身麻酔をかけておられま

した。先生は教授会の納涼会、忘年会などことあるごとに、私どもに歯科麻酔の重要性、窮状を熱心に説かれ、2007年に私が歯学部長に就任した際の重要事項としてあげられていた「教員定員の適正化を目指した教員の再配置」の中でも、歯科侵襲管理学分野の充実が優先すべき課題の一つでありました。ご存じのように、法人化移行前から新潟大学では、継続的に行われていた教員定員削減に加え、流動化定員の抛出があり、声を大にして既得権を主張する教授がいる中で、教員定員の再配置は困難を極めました。教授会構成員のご理解もあり、今年度から歯科侵襲管理学分野に大学院担当助教1を配置することが可能となり、大学院講座として教授1、准教授1、助教2の形をとることができました。これまでの染矢先生のご苦勞に学部長として少しは応えることができたのではないかと考えております。また、教員定員要求の厳しい中、教授会のご理解を得、優先的に歯科侵襲管理学分野の後任教授の選考を進めることができましたことも、染矢先生が初代教授として、ご苦勞の中、蓄積されてきた実績、そして先生の熱意のたまものだと考えております。

高齢化社会が進む中、65歳という年齢は人生の通過点の一つにしか過ぎません。超高齢社会の到来、疾病構造の変化、国民の医療に対する意識の変化、価値観の多様化が進む中、医歯学総合病院の社会的重要性、果たすべき役割が高まっています。大学を取巻く状況が混沌としている中、情熱ある先生をご定年とはいえ、お送りしなくてはならないことは誠に残念でたまりません。先生の今後のご健勝とますますのご活躍をお祈り申し上げますとともに、ご在職中と変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。長い間、誠に苦勞さまでした。ご定年後の第二の人生を健やかに過ごしてください。ありがとうございました。

染矢源治先生に感謝

顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野 齊 藤 力
医歯学総合病院副院長

この度、停年を迎えられる染矢源治先生の新潟大学歯学部発展に対する多大な貢献に対し、衷心より感謝し厚く御礼申し上げます。平成14年に行われました歯学部附属病院と医学部附属病院の統合による医歯学総合病院の設置、平成18年の東病棟完成に伴う歯科/口腔外科病棟移転と手術室増設に伴う歯科/口腔外科手術室の移転、および平成21年10月の新中央診療棟完成に伴う歯科/口腔外科手術室の再移転は、口腔外科と歯科麻酔科にとりまして大きな出来事が続きましたが、いずれの時にも何事もなく安全かつ順調に手術を行うことができましたことは、偏に先生の御尽力の賜と思っております。

歯科麻酔は旧口腔外科学第二講座の中にあっただことから、現在でも3科（歯科麻酔科、口腔再建外科、顎顔面外科）合同の医局旅行や、忘年会が行われ、さらには日歯大新潟生命歯学部の口腔外科、歯科麻酔科とともに両校で新潟口腔外科・歯科麻酔科集談会を続けております関係で、常日頃から先生からは一方ならぬご高誼に預っております。先生は覚えていらっしゃると思いますが、最初にお会いして話をさせていただいたのは昭和58年に新潟大学を訪れた時のことでした。そのときの第一印象は「怖い先生」でした。私は平成13年11月に新潟大学歯学部へ赴任することになりましたが、爾来、今日に至るまで染矢源治先生御

自身による全身管理下で多くの手術の執刀をさせていただきました。第一印象とは大きく違い、決して怖い先生ではありませんでした。何時でも安心して手術に専念することができましたし、大変光栄なことと思っております。先生は全身麻酔が難しいと思われる症例でも真剣に対応策に検討をさせていただき、常に患者さんの立場に立って第一線で麻酔をかけられているのを目のあたりにしてきましたが、その姿勢から学ぶべきものは多くありました。先生は医局員には大変厳しい反面、患者さんに対してはとても優しく、なかでも口唇口蓋裂などの顎顔面口腔領域の先天異常患者さんやその家族には就中優しく接していたのが印象的でありました。手術後もたびたび病室を訪れては患者さんやその家族といろいろな会話をされているところをみるにつけ、医療の本来のあるべき姿を言葉ではなく実践で示されてこられたものと思います。診療上のことでは、時に議論もしましたが、先生から多くのことを学ばせていただきました。

先生におかれましては、これからは大好きな魚釣りを思う存分に楽しまれることと思いますが、今後とも、後に続くものに対して御指導、御鞭撻を御願いたしますとともに、先生の益々の御健勝と御活躍を心より祈念申し上げまして御退任の祝辞と感謝の辞とさせていただきます。

染矢教授ご退官に寄せて

歯科侵襲管理学分野・准教授 瀬尾 憲 司

平成元年6月、新潟大学歯学部附属病院に歯科麻酔科が設置され、染矢源治第2口腔外科助教授は平成2年1月16日付で同診療科の教授に就任されました。染矢教授は昭和51年に東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学教室から海野前東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔科学教室教授の後任の専従麻酔医として新潟大学歯学部へ赴任されました。それ以降、歯学部における全身麻酔・精神鎮静法などの全身管理から、歯科麻酔学の学生教育に三十年近くの長きにわたり日夜奮闘されてきました。歯学部附属病院での全身麻酔下手術が始まった昭和43年に69例であった手術件数も次第に増加し、昨年の平成21年では中央手術室の症例数だけで全身麻酔374例、精神鎮静法165例となり、さらに外来における全身管理も増加傾向にあるという多忙の毎日です。平成4年には10ヶ月間文部省在外研究員としてアメリカ合州国ピッツバーグ大学、カリフォルニア州立大学ロスアンゼルス校で歯科麻酔学を研修され帰国。アメリカで慣れ親しんだ静脈麻酔薬であるプロポフォールを積極的に取り入れて使用し、日本の口腔外科手術での安全性と有効性を発表しました。平成8年には第24回日本歯科麻酔学会総会を新潟市内で主催されました。以来、歯学部附属病院では副病院長を、日本歯科麻酔学会では退官までの長い期間、理事という大役を果たされて、日本歯科麻酔学会の法人化、歯科麻酔専門医制度の確立、さらには倫理規定の創設など歯科麻酔科学の発展に大きく貢献されました。

歯科麻酔科の診療業務は中央手術室での全身麻酔と精神鎮静法を利用した局所麻酔管理をはじめとして、歯科麻酔科診療室におけるペインクリニック、歯科心身症外来、障害者歯科治療などをは

じめとした精神鎮静法など多岐に及びます。朝早くから手術室に缶詰め状態になり、遅くなると翌日の朝方までかかることも決して珍しくはありません。したがって、講義室以外では学生の皆さんや歯科の先生方に昼間お目にかかることが少ないのも仕方がないことであり、昼食でさえも手術室の控室で済ませることが多いのです。手術は何時何が起こるか分からないことと、時間が大変不規則であるために持ち場を離れることができないのです。こうした不規則な生活を教授は歯科麻酔科の開設の10年前からこの3月のご退官まで続けてこられました。

臨床からみた染矢教授の印象は「非常に慎重」です。安易な予想での手術の計画を決して許しませんでした。どんなに口腔外科が望んでも決して首を縦に振らない様子を脇で何度も目にしてきました。しかしこれも患者の安全性を第1に考えたことの表れでしょう。そのお蔭もあって当科では今まで麻酔事故がありません。これは当科が誇るべきことですが、一方では学会発表の演題を捻出するときに症例報告の話題がなくて困ったこともありました。歯科麻酔とは「痛くなく、安全で、快適に」をいつも口癖のように繰り返して、歯科治療における患者の安全性を重視してこられた姿勢には敬服いたします。私たちが最も引き継ぐべき訓戒でしょう。

ご退官直前には体調を崩すことが多くなり、宴会でもお酒を飲まれないことも多々ありました。しかしこれからは体調に留意していただき、趣味の“釣り”を十分に楽しまれ、心と体の休養を取られることを祈念いたします。本当に長い間ご苦労様でした。